教育

あつし塾長の

# 子のやる気 親の気づき

○○47

第3章・ゆとり教育世代の見えない学力

## 複雑受験

# 〝学校の勉強〟を大切に

毎年、志学塾では小6の3学期に中1で習う「正負の数」の先取り授業を行います。小6の塾生たちに「大きい数はどこまで言えるかな？」と位取りを聞いてみます。みんな張り切って「百億、千億、一兆…千兆、一京…千京、一垓…無限大！」と競います。「では小さい数は？」と聞くと「0・1、0・01、0・001…」とだんだん声が小さくなります。私は頃合いをみて「いつゼロに会える？」とヒントを出しながら「今日はマイナス5℃だけど」と窓の外を眺めて見せます。「ゼロはない。無いものを表す」という不思議な話に子どもたちの興味は尽きません。

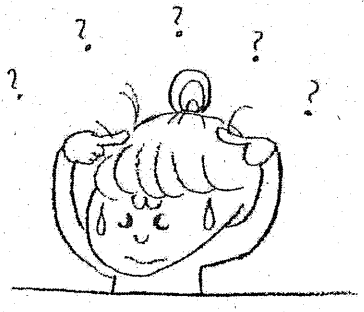
昨年の県立高校前期入試の日のことです。小6の授業中に一人の男の子が「先生、学校の勉強だけでは高校には入れないんでしょう？」とポツリと言いました。どうやら県立高校入試の〝特色化選抜〟のことを知り「中学校では〝学校の勉強〟以外にも何か重大なことがありそうだ」と気になったようです。

青森県では2006年度から推薦制度を見直し、前期入試、後期入試と2回受験できるようになりました。ちまたでは「2回も受験でした。しかし、それによって2回落ちる機会も生まれたのです。前期で落ちた子はまるで罰点をつけられたような暗い気持ちの中、次の受験の選択を迫られました。「後期に向けて頑張るぞ」「後期があってよかった」などとはとても思えなかったと思います。

昨年からは、前期入試の中を「一般と特別」に選抜枠を設けることになり、さらに複雑な受験制度になりました。だから「特別選抜枠って何？　どうも学校の勉強だけじゃ駄目みたいだ」と小学生のうちから想像している勉強があるとしたら「初めから言ってほしい！」と思うのは子どもたちの率直な気持ちです。

〝学校の勉強〟は社会に出ても役立たないとか、受験勉強で子どもがかわいそうだとかいう批判もあるでしょう。しかし、3Dゲームやインターネットに囲まれて育った子どもたちでも、もっと分かるようになりたい、もっとできるようになりたいという意欲は確実に芽吹いています。勉強の楽しさは黒板や紙教材の2次元の世界でいかに指導者が子どもたちの想像力に火をつけるかにかかっています。子どもは学び続ける指導者に出会って努力するようになり、その努力が想像力の本質であると思います。

## 学び続ければ想像力生む



by yoriko

親の時代から中学校での〝学校の勉強〟は、9教科に区分されていました。理科と社会、そして技術家庭、美術、音楽、体育と世の中を教えるには十分な教科がありました。これらの教科以外に入試で問われるようです。

私は、入試制度の改革に翻弄（ほんろう）されて「特別選抜」に直面している子どもたちに、〝学校の勉強〟だけでも一生懸命取り組むべきだと伝えたいと思います。

（畑山篤＝志学塾塾長）

できていいね」という声も少なくありません

# 子ども囲碁に親しんで

子どもの安全科学 ―3

# 朝のあいさつ活発に

「の目」

圏でも、あいさつもく授業が始まれば、こちなく危うい空気包まれてしまうのです。

子どもにあいさつ大いにさせてくだい。特にい生活圏のあいさつもせずそっぽを向いています。先生はこう考えます。「私、昨日何かまずいこと言っちゃったかしら」。教室という生活するという意味を持つ行為です。つまり、お互いの信頼関係を確かめ合うということ。やがてその意味は拡大